

現代の若者の価値観と主観的幸福感の検討¹

南 学

Youth's sense of values and happiness

Manabu MINAMI

要 約

本研究では、現代の若者がもつ幸福観と価値観との関連から現代の「幸せな若者」(古市, 2011)について明らかにすることを目的として検討を行った。結果は、「主観的幸福感」と「くつろぎ追求」とは有意な相関が見られず、「将来無関心」とも相関はなかった。また、幸福観によって若者を3群に分けたところ、「幸せな若者」像に近い「現状満足群」よりもすべてのことを追求する若者像である「全追求群」のほうが、「主観的幸福感」が高いことが見出された。

これらの結果から、「幸せな若者」像はすべての若者にあてはまるものではないこと、「幸せな若者」の幸福感がとくに高いわけではないことが見出され、古市(2011)が提唱した若者の価値観の傾向と幸福感を結びつけた「幸せな若者」論は実証性に欠けることが示唆された。

問 題

1. 幸福感への関心の高まり

近年、先進諸国で経済的な成長が限界を迎え、経済成長が伸び悩むにつれ、幸福感と経済指標が必ずしも一致しないこと、経済的指標が人々の物心の豊かさを測定する物差しとしては必ずしも十分ではないことが指摘されている。これらの指摘から「経済成長=幸せ」という考えが見直され、国の豊かさを示す指標として経済指標のGDP(国内総生産)ではなく個人・社会全体の幸福感を上げようとする動きが出てきた。日本においても2010年に内閣府で「幸福度に関する研究会」が発足し、2011年12月に幸福度指標案が発表された。このような世界や世間の動きから、現代において幸福感への関心が高まっているといえるだろう。

2. 日本人の幸福感に関する研究

内閣府の幸福度に関する研究会(2011)は10代から70代の国民139名に対して幸福度指標に関するアンケート調査を実施し、「幸福を標準化するときに重要であると思われること」を29項目の中から5項目選ばせた。その結果、最も多く選ばれた項目は「仕事

の満足度や経済的安定」であり、続いて「心の健康」「犯罪の被害の少なさ」「貧困の状況」であった。これより、日本人にとって「経済的安定」と「心の健康」が幸福感を得るための要因であると考えられる。2011年の調査結果を年齢別に見てみると10代・20代は「心の健康」が約5割を占めているのに対して30代・40代では「経済的安定」が約5割を占めていた。

有元・風間(1997)は“幸福と感じる時”について、「仕事」と答える割合が45～49歳の中年層は高いのに対して25～29歳の若年層は低いということを明らかにした。これより、若者と大人では“幸せである”と感じる要因に違いがあり、若者の幸福感は“経済的豊かさ”よりも“精神的豊かさ”によって得られていると考えられる。

現代の大人たちは急激な経済復興を遂げた高度経済成長期の時代に生まれ育っている。彼らは家庭に新しい家電などのモノが増えるのを実感する時代に育ってきており、“経済的豊かさ”に幸福感を求めるようになったのではないかと考えられる。それに対して現代の若者は、バブルが崩壊し、「失われた20年」といわれる不況の時代に育ってきている。同時に、彼らはすでにモノに満たされて育ってきており、インターネッ

1 本研究は、三重大大学教育学部卒業生の川端由香莉が提出した卒業論文『現代の「幸せな若者」に関する研究－若者の持つ価値観傾向との関連から－』に加筆修正を加えたものである。

トの普及もあり、インフラや生活環境といった面では、とても豊かであるといえる。それゆえ、現代の若者は、大人たちのように物質的・経済的な豊かさにあまり幸せを感じなかったのではないかと考えられる。

若者が“幸せである”と感じる要因について、数多くの研究が行われている。大学生を対象とした邵・堀内・大坊（2007）の研究では、「生活充実感」「恵まれた人間関係」「幸運」「他者の幸福」「家族」と幸福感との間に有意な相関が見られ、家族や周りの人と良い人間関係を保っていること、また周りの人が幸せであり、日常生活においてラッキーなことが多く起こると、幸福感につながることを示唆した。曾我部・本村（2010）の研究では、大学生の主観的幸福感を規定する社会心理的要因の構造は「将来社会への期待」「自己評価の一致」「人間関係における親密性」「生活資源の豊かさ」といった4つの因子によって説明されることを明らかにした。また、有元・風間（1997）は若年層が趣味や家族との対話に幸福を感じていることを示した。これらの研究からも、若者の幸福感は“精神的豊かさ”によって得られるのではないかと考えられる。

3. 日本の若者を取り巻く状況と若者の幸福度との関連

古市（2011）が若者の「幸せ」を支える生活の基盤自体が腐り始めていると述べるように、日本は少子高齢化や財政赤字、領土問題などの他国とのトラブル、就職率の低下などの問題があり、現代の若者を取り巻く社会の状況は悪く、また将来についても良くなるとは言えない状況である。しかしこのような状況にも関わらず現代の若者は幸福感が高いということが明らかにされている。内閣府の「世界青年意識調査」（2004）によると、「いろいろ考えてみて、あなたは幸せですか」という質問に対して「幸せだ」「どちらかといえば幸せだ」と答えた18～24歳の若者は9割以上であった。また村田・政木（2013）は、NHK放送文化研究所の「中学生・高校生の生活と意識調査2012」の報告において、「今、幸せと思うか」という質問に対して「幸せだ」と答えた中高生が9割以上であることを明らかにした。社会の状況は幸せとは思えない現代において、若者の幸福感が高いということは大きな疑問である。幸福感の高い若者はどこに幸せを感じているのだろうか。

片桐（2009）はNHK世論調査研究所が行っている「日本人の意識」調査の生活目標に関する調査の結果から、「世の中をよくする」というような社会に対する目標よりも「自由に楽しく過ごす」「豊かな生活を築く」「なごやかな毎日を送る」といった私生活に対する目標を選択する人が多いことを示し、学生たちは

身近で小さな幸せが一番大事であると述べている。また、古市（2011）は政治に対して無力感と無関心を抱き、「今、ここ」の身近な幸せを大事にする「コンサマトリー（自己充足的）」な価値観を持った若者が1990年代以降増えていったと述べている。豊泉（2010）もNHK放送文化研究所の「中学生・高校生の生活と意識調査」の望ましい生き方を尋ねた項目の結果から、良いと思う生き方が「他人に負けずにがんばる」生き方から「のんびりと自分の人生を楽しむ」生き方に反転したことを示し、若者は自分の周りに目を向けることで、そうした生き方をしだいに可能にしてきたと述べている。

古市（2011）は、多くの調査で共通して、「今よりもずっと幸せになる将来」を想定できないと考えられる高齢者は幸福度や生活満足度が高く、また20代の生活満足度が上昇するのは一般的に「不況」と言われるような「暗い時代」が多いことを指摘している。実際、「今日よりも明日がよくなる」と信じていることができ、自分の生活もどんどんよくなっていくという希望があった高度成長期やバブル期の若者は生活満足度が低かった。これより古市は、「今日よりも明日がよくなる」と思う時、人は「今が幸せ」と答えるのであるという解釈を行っている。つまり、「今、とても幸せ」と感じられる若者の増加が、「幸せな若者」の正体であるというのである。ただし、古市の仮説はコンサマトリー化している若者の増加と若者の幸福感が高いことを思案的に結びつけているだけであり、実証的検討はされていない。

もちろん現代の若者すべてがこのような価値観を持っているとは限らない。今まで行われてきた若者の価値観に関する研究は若者の持つ価値観の傾向を示しただけであり、それらの価値観の傾向がすべての若者に共通して見られるとは考えにくい。また、これらの論は若者の価値観の傾向と若者の幸福感を単に結びつけているだけであり、実証的に検証される必要があると思われる。

4. 本研究の目的

本研究では、若者の持つ価値観傾向との関連から現代の「幸せな若者」について明らかにすることを目的とする。

主観的幸福感を高めるための生き方にはどのようなものがあるのだろうか。この問いに答えるために“幸せ”への動機づけをとらえるための尺度である浅野・五十嵐・塚本（2014）が作成した日本版 HEMA 尺度を使用する。HEMA (Hedonic and Eudaimonic Motives for Activities) 尺度とは個人や社会全体の“幸せ”を実現するために重要な意味を持っている快

楽主義と幸福主義の両方を測ることができる尺度であり、幸福感と関連があると考えられる。快樂主義は、自己の心地よさを求めた動機づけを指し、幸福主義は、自分自身の存在を最大限に生かすこと目指した動機づけを指している。本研究で使用する日本版は、ポジティブ感情を覚醒度の軸によって分類するモデルの提案を受け、日常活動において覚醒度の低いポジティブ感情を求めるかを測る「くつろぎ追求」、自分自身の存在を最大限に生かすことを目指しているかを測る「幸福追求」、覚醒度の高いポジティブ感情を求めるかを測る「喜び追求」の3下位因子で構成されている。「くつろぎ追求」と「喜び追求」が快樂主義に対応し、「幸福追求」が幸福主義に対応する。現代の若者の幸福感は、“精神的豊かさ”の中でも“くつろぎ”や“やすらぎ”といった覚醒度の低いポジティブ感情による“精神的豊かさ”を幸福感として捉えていると考えられるため、先行研究で指摘されている現代の若者の幸福感は「くつろぎ追求」が高くなることが予測できる。

若者の将来や今に対する価値観を測るために、白井（1993）が作成した時間的信念尺度を使用する。時間的信念とは時間的展望に対する個人の価値体系であり（白井，1993）、将来・現在・過去それぞれに対する価値観を測ることができると考えられる。また、従来の時間的展望に関する尺度では“今のために今を大切にする”ことと“将来のために今を大切にする”ことが混在していたが、時間的信念尺度では「現在重視」と「満足遅延」という下位尺度によって区別がされており、“今”に対する価値観を正確に測ることができると考えられる。将来に対して無関心であるかを測る「将来無関心」、今を大切にしているかを測る「現在重視」、将来のために今に満足せず努力しているかを測る「満足遅延」の3下位因子で構成されている。

若者のコンサマトリー的な価値観を測るために、久世・和田・鄭・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・内山・平石・大野（1988）の私生活主義尺度を使用する。なお本研究では下位尺度の「身近な事象への関心・社会的な事象への無関心」のみを使用する。私生活の充実、私的人生観、他者への関心の低さ、社会的政治的無関心などを指し、社会よりも私生活を重視し、コンサマトリー的な価値観を持っているかを測ることができると考えられる。

本研究では、主観的幸福感を測るために曾我部・本村（2010）が作成した主観的幸福感尺度を使用する。自分自身がどれほど幸福であるかを聞く項目で構成されており、主観的な幸福度を測ることができると考えられる。

方 法

調査参加者 三重県の国立大学の学生 47 名、愛媛県の私立大学の学生 111 名、合計 158 名を対象に質問紙調査を実施した。欠損値を除いた大学生 150 名（男性 74 名、女性 76 名、平均年齢 19.0 歳、SD=.79）を分析対象とした。

質問紙の構成

(1) 価値観を測る尺度

I. 日本版 HEMA 尺度

浅野ら（2014）が作成した日本版 HEMA 尺度（11 項目）を使用した。「くつろぎ追求」「幸福追求」「喜び追求」の3つの下位因子から成る。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。Table 1 に使用した質問項目及び α 係数を示す。

Table 1 日本版 HEMA 尺度の項目および平均（7段階尺度）

	平均 (SD)
くつろぎ追求 ($\alpha = .850$)	
くつろぎを追求すること	5.09 (1.37)
気楽さを追求すること	5.25 (1.25)
やすらぎを追求すること	5.26 (1.21)
のんびりとした気分を追求すること	5.09 (1.39)
幸福追求 ($\alpha = .768$)	
技術の向上、学習、あるいは物事への洞察力の獲得を追求すること	5.05 (1.21)
自分の信念に従った行動を追求すること	5.23 (1.10)
優秀さ、あるいは自分の理想を追求すること	5.14 (1.23)
自分自身の力を最大限に生かす方法を追求すること	5.21 (1.22)
喜び追求 ($\alpha = .757$)	
喜びを追求すること	5.67 (1.09)
楽しさを追求すること	5.83 (0.93)
面白さを追求すること	5.41 (1.06)

Table 2 時間的信念尺度の項目および平均（5段階尺度）

	平均 (SD)
将来無関心 ($\alpha = .665$)	
今が楽しければそれでよい	2.95 (1.24)
無理に見通しを持つ必要はない	3.43 (0.97)
どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない	3.08 (1.17)
先がわからないなら、わからないまま生きる道はある	3.56 (1.02)
将来のことをいちいち考えてそれに縛られるのは不自由だ	3.19 (1.15)
それが将来役に立つかどうかより、することが楽しいかどうかが大切だ	3.33 (1.02)
現在重視 ($\alpha = .622$)	
二度と来ない今を大切にしたい	4.11 (0.87)
生きている実感のある今の一瞬が一番大切だ	3.93 (0.90)
今が大切にできないで将来が大切にできるはずがない	3.91 (1.08)
満足遅延 ($\alpha = .517$)	
自分の夢の実現のために頑張るのが人生だ	3.86 (1.02)
今がいくらでも将来のためなら我慢するべきだ	3.87 (0.87)
今していることの価値は将来になってわかるものだ	3.87 (0.87)

Table 3 私生活主義の項目および平均（5段階尺度）

	平均 (SD)
身近な事象への関心・社会的事象への無関心 ($\alpha = .794$)	
働くことや勉強することを最小限にして、自由な生活を楽しみたい	3.16 (1.08)
自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない	2.93 (0.93)
結局、人のことは自分とは関係のないことだ	2.91 (1.01)
自分ひとりが努力しても世の中はよくなるしない	3.37 (1.07)
ボランティア活動や奉仕活動などに興味や関心はない	2.70 (1.12)
戦争や飢餓など日常生活と関係のない問題は忘れがちである	3.09 (1.07)
社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う	2.24 (0.93)
政治や社会の問題など、難しいことを考えるのはめんどろである	3.04 (1.07)
現状に甘んじ、与えられた範囲内で自分の生活を楽しむ	3.08 (0.96)
何事も深く考えず、その場しのぎですごしている	3.07 (1.07)
毎日毎日、あくせくするよりものんびり暮らしたい	3.67 (0.93)

Table 4 主観的幸福感尺度の項目および平均（4段階尺度）

	平均 (SD)
主観的幸福感 ($\alpha = .731$)	
全般的にみて、私は自分のことを幸福であると思う	3.03 (0.73)
私は自分の同年齢の人と比べて、幸福であると思う	2.70 (0.71)
私はどのような状況下でも人生を楽しみ、幸福でいられる	2.50 (0.79)
私は、はたから見たときに幸せそうに見えたとしてもまったく幸せではない*	2.81 (0.76)
*印は逆転項目	

II. 時間的信念尺度

白井（1993）が作成した時間的信念尺度（12項目）を使用した。「将来無関心」「現在重視」「満足遅延」の3つの下位因子から成る。「賛成」から「反対」の5件法で回答を求めた。Table 2 に使用した質問項目及び α 係数を示す。

III. 私生活主義

久世ら（1988）が作成した私生活主義尺度のうち、「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」（11項目）のみを使用した。本研究ではこの1下位因子を「私生活主義」と呼ぶ。「非常に賛成」から「非常に反

対」の5件法で回答を求めた。Table 3 に使用した質問項目及び α 係数を示す。

(2) 幸福感を測る尺度

曾我部・本村（2010）が作成した主観的幸福感尺度（4項目）を使用した。「大変そう思う」から「全くそう思わない」の4件法で回答を求めた。Table 4 に使用した質問項目及び α 係数を示す。

手続き 授業時に質問紙を配布し、回答を求めた。回答に要した時間は10～15分程度であった。

Table 5 全下位尺度間の相関係数

	日本版 HEMA 尺度			時間的信念尺度			私生活主義	主観的幸福感
	くつろぎ欲求	喜び追求	幸福追求	将来無関心	現在重視	満足遅延		
くつろぎ欲求	—	0.45***	-0.04	0.22**	0.07	0.10	0.25**	0.08
喜び追求		—	0.43***	0.13	0.25**	0.20*	-0.13	0.23**
幸福追求			—	-0.28**	0.22**	0.32***	-0.43***	0.25**
将来無関心				—	0.06	-0.10	0.47***	-0.01
現在重視					—	0.44***	-0.27**	0.18*
満足遅延						—	-0.32***	0.19*
私生活主義							—	-0.16*
主観的幸福感								—

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

結 果

1. 各尺度の下位尺度間相関

下位尺度間の関連を見るために、全下位尺度間の相関係数を算出した (Table 5)。

日本版 HEMA 尺度では「喜び追求」と「くつろぎ追求」「幸福追求」の間に有意な正の相関が見られた。時間的信念尺度では「現在重視」と「満足遅延」の間に有意な正の相関が見られた。

「くつろぎ追求」と「将来無関心」「私生活主義」、「喜び追求」「幸福追求」と「現在重視」「満足遅延」、「将来無関心」と「私生活主義」の間に有意な正の相関、「幸福追求」と「将来無関心」「私生活主義」、「現在重視」「満足遅延」と「私生活主義」の間に有意な負の相関が見られた。

「喜び追求」「幸福追求」「現在重視」「満足遅延」と「主観的幸福感」の間に有意な正の相関、「私生活主義」と「主観的幸福感」の間に有意な負の相関が見られた。

2. 日本版 HEMA 尺度に基づくクラスター分析

現代の若者の特徴を分類するために、日本版 HEMA 尺度の3つの下位尺度を投入変数としたクラスター分析 (Ward 法) を行った。解釈のしやすさから3クラスター解を採用した。各クラスターの人数は、クラスター1が32名、クラスター2が70名、クラスター3が48名であった。クラスターごとの日本版 HEMA 尺度の各下位尺度得点の平均値を示す (Figure 1)。各下位尺度に対して1要因分散分析をおこなったところ、いずれも群間の主効果が有意であった (「くつろぎ追求」「幸福追求」「喜び追求」それぞれ $F_s(2,149) = 114.7, 39.0, 44.5, p < .001$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、それぞれ「向上志向群」のみが有意に低い、すべての群間において有意な差、すべての群間において有意な差がみられた。

クラスター1は日本版 HEMA 尺度得点が全般的に高いという特徴を持つため、全追求群と命名した。クラスター2は幸福追求得点が最も低いという特徴を持つため、現状満足群と命名した。クラスター3はくつろぎ追求得点が最も低いという特徴を持つため、向上志向群と命名した。

抽出された3つのクラスターの特徴を探るために、3クラスターを独立変数、時間的信念尺度の3下位尺度得点、私生活主義得点、主観的幸福感得点を従属変数とした1要因分散分析を行った。

3群ごとの時間的信念尺度の3下位尺度得点の平均値を示す (Figure 2)。群間の主効果は満足遅延得点で有意であった ($F(2,147) = 3.73, p < .05$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、全追求群と現状満足群との間に有意な差が見られた。これより、

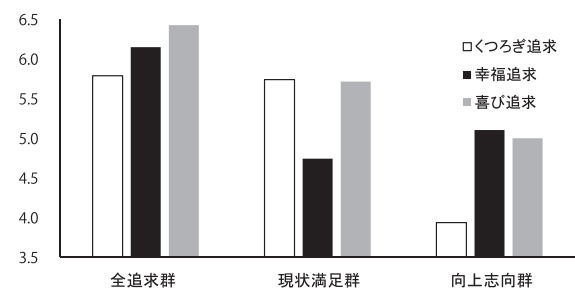


Figure 1 各クラスの日本版 HEMA 尺度得点

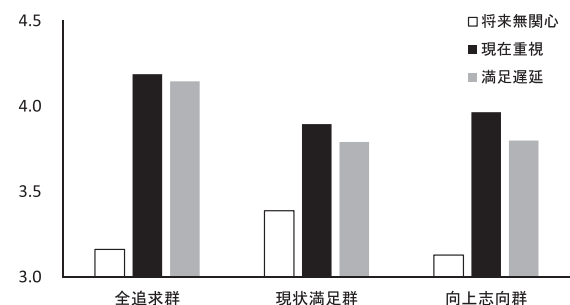


Figure 2 各クラスの時間的信念尺度得点

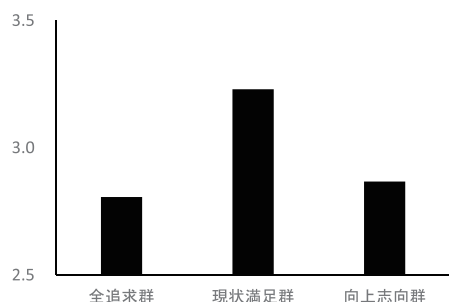


Figure 3 各クラスの私生活主義尺度得点

全追求群は他の2群と比べて満足遅延得点が有意に高いといえる。

次に3群ごとの私生活主義得点の平均値を示す (Figure 3)。群間の主効果は有意であった ($F(2,147) = 9.05, p < .001$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、現状満足群と全追求群、向上志向群との間に有意な差が見られた。これより、私生活主義得点は現状満足群が有意に高いといえる。

最後に3群ごとの主観的幸福感得点の平均値を示す (Figure 4)。群間の主効果は主観的幸福感得点で有意であった ($F(2,147) = 3.49, p < .05$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、全追求群と向上志向群との間に有意な差が見られた。これより、主観的幸福感得点は全追求群が有意に高く、向上志向群が有意に低いといえる。

考 察

1. 日本版 HEMA 尺度、時間的信念尺度、私生活主義の関連

相関係数を算出した結果、下位尺度間では日本版 HEMA 尺度において「喜び追求」と「くつろぎ追求」「幸福追求」、時間的信念尺度において「現在重視」と「満足遅延」の間に正の相関が見られた。3つの尺度の下位尺度間では「くつろぎ追求」と「将来無関心」「私生活主義」、「喜び追求」「幸福追求」と「現在重視」「満足遅延」、「将来無関心」と「私生活主義」の間に有意な正の相関、「幸福追求」と「将来無関心」「私生活主義」、「現在重視」「満足遅延」と「私生活主義」の間に有意な負の相関が見られた。

「現在重視」と「満足遅延」の間に正の相関が見られたことから、若者の“今を大切にする”という価値観は“今のため”なのか“将来のため”なのかについての区別はなく、“将来”“現在”“過去”を一直線上にあるものとして捉えているのではないかと推測できる。また「幸福追求」と「現在重視」「満足遅延」の間に正の相関が見られたことから、将来に向けて自分自身の存在を最大限に生かすことを目指しているか

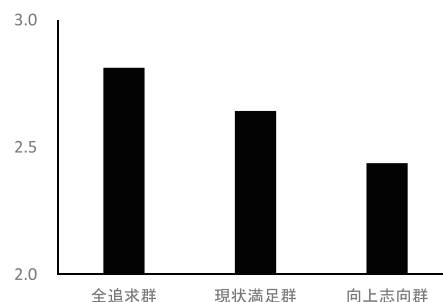


Figure 4 各クラスの主観的幸福感尺度得点

らこそ今を大切にするという考えが読み取れる。他方で「将来無関心」と「私生活主義」の間に正の相関が見られたことから、コンサマトリ的な若者は将来に対する関心がないことが明らかになった。またこのような若者は“くつろぎ”や“やすらぎ”という感情を求めており、自分自身の存在を最大限に生かしていこうとは思っていないことが「将来無関心」「私生活主義」と「くつろぎ追求」の間に正の相関、「将来無関心」「私生活主義」と「幸福追求」の間に負の相関が見られたことから示唆され、片桐 (2009)・豊泉 (2010) の見解を支持する結果であるといえる。ただし、「将来無関心」と「現在重視」の間に相関が見られなかったことから、将来に対して無関心であっても今を大切にしているとは限らないことが示唆され、また「現在重視」「満足遅延」と「私生活主義」の間に負の相関が見られたことから、コンサマトリ的であっても今を大切にしているわけではないことが示唆された。

2. 日本版 HEMA 尺度、時間的信念尺度、私生活主義と主観的幸福感の関連

(1) 相関分析による検討

相関係数を算出した結果、「喜び追求」「幸福追求」「現在重視」「満足遅延」と「主観的幸福感」の間に有意な正の相関、「私生活主義」と「主観的幸福感」の間に有意な負の相関が見られた。「喜び追求」「幸福追求」と「主観的幸福感」の間に正の相関が見られたことから、日常活動において覚醒度の高いポジティブ感情を求める若者、自分自身の存在を最大限に生かすことを目指している若者は幸福感が高いということが明らかになった。「現在重視」「満足遅延」と「主観的幸福感」の間に正の相関が見られたことから、“今のため”であっても“未来のため”であっても今を大切にしようとする若者は幸福感が高いことが明らかになった。この結果から、古市 (2011) が触れていなかった未来のために今を大切にしながら努力している若者も「幸せな若者」の正体であることが示唆された。また「私生活主義」と「幸福感」の間に負の相関が見られたことから、コンサマトリ的な価値観を持つ若者は

幸福感が低いことが明らかになり、片桐（2009）の見解を支持する結果とはならなかった。

この結果から、若者の価値観傾向すべてが若者の幸福感和関連しているわけではないことが明らかになり、古市（2011）や片桐（2009）の見解は若者の価値観傾向と幸福感を不必要に結びつけていることが示唆された。

3. クラスター分析による若者の分類

日本版 HEMA 尺度の 3 つの下位尺度を投入変数としたクラスター分析を行い、3 つのクラスターに分け、3 クラスターを独立変数、時間的信念尺度の 3 下位尺度得点、私生活主義得点、主観的幸福感得点を従属変数とした 1 要因分散分析を行った。この分析により、現代の若者には全追求群、現状満足群、向上志向群の 3 つのタイプが存在することが明らかになった。

全追求群は日本版 HEMA 尺度の得点が全般的に高く、「満足遅延」得点が高く、「私生活主義」得点が高い群である。全追求群は、日常活動において自己の心地よさを求めながら自分自身の存在を最大限に生かすことを目指しており、あらゆる幸福を求めようとしていられる。また未来のために今を大切に、私生活ではなく社会に目を向けている。この特徴から、全追求群は、快楽主義と幸福主義の両方を兼ね備えた、自分の存在をより高めることに関心を示す者たちであるといえる。

現状満足群は「幸福追求」得点が最も低く、「将来無関心」得点が高く、「私生活主義」得点が高い群である。現状満足群は、日常活動において自己の心地よさと楽しさを求めており、将来に関心を示さないことから、コンサマトリー的な価値観を持っているといえる。これらの特徴から、現状満足群は先行研究で示されてきた「現代の若者の価値観」傾向を持つ若者であるといえる。今の若者は素朴に「今日よりも明日がよくなる」とは信じていることができない（古市，2011）ため、将来への関心を示さないことが考えられる。また、1990 年代以降、政治に対して無力感と無関心を抱き、「今、ここ」の身近な幸せを大事にする「コンサマトリー（自己充足的）」な価値観を持った若者が増え、若者は私生活を中心とした生き方を示した（豊泉，2010）。このような現代の若者に関する見解から、現状満足群は現代の若者の価値観傾向を持つ若者であると考えられる。

向上志向群は「くつろぎ追求」得点と「喜び追求」得点が最も低いほかは、全追求群とよく似た時間的信念や私生活主義の程度を示す群である。向上志向群は、自己の成長と楽しさを追求するもののくつろぎを求めず、現代と未来のために力を注ぎ、また私生活よりも社会の充実に目を向けている。これらの特徴から、向

上志向群は、経済成長期の若者の価値観に重なる者たちであると考えられる。経済成長期の若者は、自己の成長と社会の成長を重ね合わせ、社会の発展に全力を尽くしていたと考えられ、向上志向群の特徴を持っていたといえる。

この 3 群の「主観的幸福感」得点を比較したところ、全追求群が有意に高く、向上志向群の方が有意に低かった。高度経済成長期やバブル期の若者の価値観に似ている向上志向群の主観的幸福感が低いという点は、古市（2011）が示したように、高度経済成長期やバブル期の若者の幸福感が低いことと一致する結果であった。他方で、快楽主義と幸福主義の両方を追求する全追求群の主観的幸福感が最も高い結果となった。彼らは、将来に諦観しているわけでもなく、コンサマトリー化しているわけでもない。にもかかわらず幸福が高いという結果は、古市（2011）が指摘する『素朴に「今日よりも明日がよくなる」とは信じていることができないからこそ、「今は幸せだ」と言うことができる』という若者が「幸せな若者」の正体であるという考察には合致しない。むしろさまざまなものにバランスよく熱意を持ち、明るい将来を追求する若者たちのほうが幸福が高いという、ある意味で自然な解釈のほうがふさわしい結果であるといえる。実証的な検討をおこなった本研究の結果からは、古市（2011）の仮説はさまざまな知見から引き出した興味深い発想ではあるが、若者像をあたかも特定の人物像であるかのように過剰に画一化し、別個の現象を結びつけすぎた考察であるといえる。

引用文献

- 有元典子・風間 健 1997 充実感・生きがい・幸福感・満足感を構成する年齢別要因 日本家政学科誌, 48 (2), 113-121.
- 浅野良輔・五十嵐祐・塚本早織 2014 日本版 HEMA 尺度の作成と検討—幸せへの動機づけとは— 心理学研究, 85, 69-79.
- 古市憲寿 2011 絶望の国の幸福な若者たち 講談社
- 片桐新自 2009 不安定社会の中の若者たち 世界思想社
- 久世敏雄・和田 実・鄭 曉齊・浅野敬子・後藤宗理・二宮 克美・宮沢秀次・宗方比佐子・内山伊知郎・平石賢二・大野 久 1988 現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋大学教育学部紀要：教育心理学科, 35, 21-28.
- 村田ひろ子・政木みき 2013 中高生はなぜ「幸福」なのか～「中学生・高校生の意識調査 2012」から～ 放送研究と調査, 3, 34-43.
- 内閣府 2004 第 7 回世界青年意識調査 内閣府ホームページ
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth7/pdf/top.html> (2014 年 1 月アクセス)

- 内閣府 2011 主観的幸福感に関する研究会 内閣府ホームページ
<http://www.5.cao.go.jp/keizai/2/koufukudo/koufukudo.html>
 <html> (2014 年 1 月アクセス)
- NHK 世論調査研究所 2009 「第 8 回 日本人の意識・2008」調査 NHK 放送文化研究所ホームページ
<https://www.nhk.or.jp/bunken/yoron/index.htm> (2014 年アクセス)
- 白井利明 1993 時間的信念尺度の検討に関する研究 大阪教育大学紀要：第 V 部門, 42 (1), 51-57.
- 邵 木子・堀内 孝・大坊郁夫 2007 日本人における幸福感とは何かー包括的幸福感と領域別の幸福感の関連についてー 社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 524-525.
- 曾我部佳奈・本村めぐみ 2010 青年期における大学生の主観的幸福感ーその影響要因の探索に向けてー 和歌山大学教育学部紀要：教育科学, 60, 81-87.
- 豊泉周治 2010 若者のための社会学ー希望の足場をかける 星雲社